

4 「序文 (二)」<sup>1)</sup>



図1 ティントレット「コンスタンティノーブル陥落」(16世紀)

(ルカ・コルフェライ 中山悦子訳『図説ヴェネツィア』河出書房新社 1996, pp. 28-29)

「マルコ・ポーロ殿の次の文、<時に我らが主の御年一千二百五十の頃おい、総督殿の名代としてヴェネツィア・ポデスタが駐在する慣わしであったコンスタンティノーブルは皇帝ボードゥアンの御世に>、にまつわるジョ・バッティスタ・ラムージョ殿の解説」

マルコ・ポーロ殿はその旅行記を上のような言葉で書き出しているのだが、まさに当時何ゆえまたコンスタンティノーブルにヴェネツィア・ドージェ [総督] の名代としてポデスタ [行政長官] が駐在していたのか、その理由につき多くの歴史家たちが様々に述べているとはいえ、私としても、何よりもかくも名も誉も高い過去についての知識は、この真に神のごとき共和国の偉大さと優秀さに深く関わる事柄ゆえ、その理由をあとうかぎり簡潔かつ読者に十分納得ゆくよう、本書に先だって説明しておくことがどうあっても必要不可欠と思えたのである。そこで私は、このコンスタンティノーブル遠征についての、当共和国にあるはるか昔の書物や当時の古い文書や記録から、以下の詳細を抜き出して要約したのだが、それは小生の見るところ、必ずや親愛なる読者諸氏に御満足戴ける体のものであらうと信ずる次第である<sup>2)</sup>。

とまれ、まずはそもそも我らが救いの一千二百二年、当ヴェネツィア市にフランドルとエノーの伯ボードゥアン、その弟君アンリ、ブロアとシャルトルの伯ルイ、サン・ポールの伯ユーグら、まことにもって信仰篤きフランスならびにフランドルの大公たちが、過ぐる年十字架の印を取った諸侯に領主、司教に修道院長ら多数を伴ってやって来たことに端を発する。また彼らは多勢の軍を引き具していたが、市に迷惑をかけぬよう海際のサン・ニコロに宿営し、そこへは市当局より日々必要な食糧が支給された(その総大将はモンフェッラート侯ボニファーチオ三世だった)<sup>3)</sup>。彼らの目的は聖地のキリスト教徒の救援に赴くことにあり、そこは我らが救いの一千九十九年頃かの有名なゴドフロア・ブイヨンと諸侯による奪回以来、八十八年にわたってずっと領有されてきたのだが、少し前エジプトのスルタン・サラディンによって、ギー・ドゥ・リュジニャンの手から全シリアの王国共々エルサレムも奪い取られていた。さて、彼らはその一千二百二年十月八日サン・ニコロ・デ・リオ港より艦隊に乗り込んだのだが、その船団は前の年彼らがヴェネツィアに派遣した使節たちとの間に

結ばれた協定に基づき、当時の共和国統領リーゴ [エンリーコ]・ダンドロ閣下により彼らのために用意されたものであった。同統領は、聖地の奪回といったかくも神聖にして敬虔な企てとあらば、その老齢と盲目もものかは、信仰篤き善き総督にふさわしく自からも加わらんことを熱望した。が、それに先立ち、この遠征において彼に従うべき全市民とともに、厳粛かつ盛大な儀式をもってサン・マルコ教会の大祭壇の前で十字架の紋章をとり、共和国の定めるところにより市政府を己が息子ラニエーロの手に委ねた。当時共和国はスキャヴォニア [ユーゴスラヴィア] のザラ市を失っており、まずはその奪回に行くという取り決めが諸侯との間に結ばれたのだった。同市は陸海軍による長期の攻囲の末、十一月 [15 日] に陥落し、それまでそこを占領していたハンガリー王ベーラの手から取り戻された。やがて厳冬の季節に入ったがため、予定されていたシリア侵攻とエルサレム征服に向けての進発は見合わせられた<sup>4)</sup>。

ちょうどその最中マーニャ [アレマーニャ] 王シュヴァーヴェンのフィリップから派遣された使節たちがザラにいる諸侯のもとにやって来、少し前叔父の僭主アレクシオス三世の残酷な手から逃れて自分のもとに来ていた、コンスタンティノーブル皇帝イサキオス [二世] アンゲロスの息子にして自分の義兄弟にあたる [小] アレクシオスに同情して助けてくれるならば (アレクシオス三世は、この小アレクシオスの父であり自分の実兄でもあるイサキオス二世の目をえぐって支配者となり、かくも大いなる裏切りをもってかのコンスタンティノーブル帝国を篡奪していた)、主君と彼から広い権限を与えられていることとて大いに報酬をはずむのだがと伝えた。使節たちは、諸侯やドージェに懇願を繰り返した末、ようやくかの若者にたいする同情から、出帆でき次第その息子を父親ともども復位さすべく尽力しようとの約束を取り付けた。その時同時に、使節たちの口から次のことが非常に厳かに約束、宣誓された。すなわち、もし父共々帝位に戻してもらえたならば、彼は直ちに国全体を、すでに遙か昔そこから分離したローマ教会への服従のもとに再び戻すのみならず、諸侯に対して銀二十万マルクと全軍に対する食糧を提供する、さらにはこの聖なる使命のため向こう一年間歩兵一万を自費で負担する、というものであった。そのうえ、生涯にわたって五百人の騎兵を聖地に自腹で駐屯さすことも約束した<sup>5)</sup>。

この契約が結ばれ、双方互いに厳かに誓い合った後、使節一行は出立し、マ

ーニャのフィリップのもとに戻り、諸侯とドージェによって指定されたかの若者が共に出帆すべくザラで彼らと落ち合うべき日、復活祭の数日後 [1203 年 1 月 25 日]、を伝えた。彼が到着すると、艦隊を整えて兵を乗せ、まっすぐにコンスタンティノーブルへと向かい、数日でそこに着き、カルケドン海岸に上陸した。そこは海峡[金角湾]をはさんだコンスタンティノーブルの対岸で[ガラータ地区]、当時ギリシア皇帝のとても美しい宮殿があった。ウシェレ usciere (運搬船、今はパランデーリャ palandera という) から馬を降ろし、諸侯は戦闘を命じたのだが、それは後に市への襲撃と至らずにはおかなかった。同海岸で僭主アレクシオスの提督と小競り合いがあったがこれを破り、ドージェ・ダンドロのガレー 船の舳先に若きアレクシオスを乗せて再び海に漕ぎ出し、コンスタンティノーブルの城壁と塔に鈴なりになっている同市のギリシア人に示して、彼に降伏するかどうかを見ようとした。かくて海峡を渡り、コンスタンティノーブルの地に上陸したが、その岸には僭主アレクシオスが上陸を阻止すべく多数のギリシア人歩兵・騎兵と待ち構えていた。が、同皇帝は敵のかくも大胆な行動に仰天して怖じ気づき、すぐ退却した。また、非常に頑丈な鎖でそことコンスタンティノーブルを結んで港を封鎖していたペーラ塔は フランス人によって占拠された。

陸からは彼らフランス人によって、海からはその船とガレー船でもってヴェネツィア人によって包囲が敷かれ、攻撃命令が下されると、ペーラ湾にガレー船を並べたドージェの軍隊は、攻城機 mangani と投石機 perlere を船で運び、戦闘を開始した(というのも、今日の戦争で普通使用されるような驚くべき兵器はまだなかったからである)。そして勇敢に市壁を攻撃したから、城壁は数日足らずのさほど長期に渡らぬ戦闘の後、あたかも神の恵みによるかのごとく奪取され、かくて市の塔の一つにサン・マルコの旗が翻るのが目にされたが、ギリシア人はそれがどのようにしてそこに打ち立てられたのか誰も理解できず、慌てふためいてその地区の塔二十五以上を早々に放棄し、逃走した。塔はすぐドージェによって占拠され、中にヴェネツィア守衛兵が配置されたが、そのニュースは陸上部にいた諸侯に直ちに伝えられた。それを聞くや彼らは攻撃を倍加し、城壁のそこかしこに梯子を架けて登った。こうして瞬く間に市の一部が奪われ、敵の沢山の家に火が放たれた。その時僭主アレクシオスは、敵勢



かなわぬと見て新たな忠告を聞き入れ、全軍を率いて市の二つの門から戦場に打って出た。諸侯は、かくも多勢の敵が向かってくるのを見て自軍を集結させ陣を敷いたのだが、攻撃は真正面から以外なかったから、今や遅しと激突の態勢に入った。あたかも全戦場が敵の大隊に覆われたかのごとくで、彼らは整然と確かな足取りで諸侯に向かって進撃してきた。が、六大隊しか持たぬ諸侯がかほどの大群の攻撃を待ちかまえている光景たるや、驚くべきものだった。かの僭主は自軍と共に前進し、もう遠くからでも易々と矢が届くほどの距離に迫っていた。

これを聞くやヴェネツィア・ドージェは、生きるも死ぬるも巡礼団と共にありたいと言ってすでに征服していたかの塔を放棄させ、ただちに自軍に乗船を命じた。そして上陸するや全兵力を率いて陸上軍と合流した。巡礼団の大隊は敵の面前にあって常に整然かつ毅然としていたので、ギリシア人は攻撃する気力を持ちえなかった。これを見て僭主は度を失い、直ちに兵を退き始め、市中に戻った。そして持てるだけの宝石財宝を抱え、妻も友人も打ち捨て、何もかも放って、ただ自分の命のことしか考えずに次の夜逃げ出し、八年二か月と十日の間暴君として君臨した（という）市と帝国を哀れにも放棄した。ちょうどその暴君の逃走の折り、盲目の皇帝イサキオスが獄から救出され、国民によって帝位に連れ戻され、帝衣をまとい、家臣の手で丁重かつ華々しくブラケルナ宮殿に迎えられた。しかるに彼はその時、夜の暗闇ゆえにそうしたことは非常に困難だったにもかかわらず、どうあっても息子アレクシオスをその腕に抱き締めたいと望み、軍の中に呼びにやって他の諸侯と共に丁重に連れて来るよう命じた。が、諸侯はその前に、息子と娘婿フィリッの使節たちによってザラで彼の名において約束されたことが翌日厳かに誓約されないうちは同意できないとして、息子との間で取り交わされた契約を確認させるべく、夜が明けるとドージェと諸侯の名代としてヴェネツィア人とフランス人それぞれ二人を皇帝のもとに遣した。そして誓いの言葉と皇帝書状をもってそれが確認され、彼がいつも使っていた黄金の玉璽でもって封印されてようやく、諸侯は馬にまたがり、青年を市にいた父のもとに伴い、彼は父によって非常な悦びのうちに迎えられたのだった。それから数か月後の八月の最初の日、サンタ・ソフィア教会にて彼らのしきたりに従って盛大な祝典と荘重な儀式のもとに総主教の手

で戴冠された。

この麗しくも慈悲深い作戦が諸侯とドージェによって遂行された結果父子共に復位したのを見、ザラで結ばれた同盟は九月のサン・ミケーレの日[29日]までしか有効でなかったこともあり、彼らは今となっては予定どおりシリアに向けての旅に出立したいと望んだ。出発の時期が迫り、無駄に時を過ごして所期の目的を遂げるこれほど善い機会が失われないようにと、約束の金とザラでの契約の残りを払うよう、老イサキオスと青年皇帝に伝えた。アレクシオスはまったく愛想のいい言葉と懇願でもって自らの狡猾と欺瞞を取り繕い、まんまと彼らの出発をサン・ミケーレの日から二月にまで引き延ばすことに成功し、翌年のサン・ミケーレの日までの同盟を改めて誓い、それまでに契約したものをすべて支払うことを約束した。諸侯は、自分たちのおかげで父と共に復位できたのだから、彼もまた約束を守るものと深く信じてその言い訳を受け入れ、アレクシオスの頼みに応じてかの地に留まったのだった。

ところがそうこうするうちにアレクシオスは、家臣の悪しき進言によってかそれとも別の理由によってか、自分をこれほど親切丁寧に助け、かくも大きく目ざましい恩顧を施してもらったドージェと諸侯たちに対して、露骨に邪険で信なき態度を見せ始め、果はてとうとうある日厚かましくも、金匱をもって封印された父の皇帝書状、それはドージェのもとに保管されていたのだが、によって明らかであるにもかかわらず、前に約束したことを打ち消すまでに至った。諸侯は、約束を果たすよう何度も何度も求めたのだが、かくも愚弄された以上己が名誉を守るためやむなく、彼の破廉恥と帝国の不名誉を糾弾して脅迫をもって支払いを迫るほかになく、ついに戦端を開くに至った。かくて戦いは、この青年皇帝の不誠実ゆえに、再び激しくまた雄々しく開始されたのだった。

こうしてコンスタンティノープルがまたもやフランス人とヴェネツィア人によって海陸両面から包囲されていたとき、アレクシオスは自分の近親で忠臣だった、やはりアレクシオスなる名の、眉毛がくつついていたためからかい半分に俗にマルクルフォ Marculfo と呼ばれる公爵の裏切りにあった<sup>6)</sup>。ある夜深い眠りに落ちていたところを襲われ、とある暗い牢獄に放り込まれ、数日後帝位六か月日にして密かに首を絞められたのだった。毒はその前に獄中で三度盛られたが、彼には効かなかったからである。アレクシオスが死ぬと、自然に

死亡したかのごとく皇帝として葬送され、マルクルフォは家来の応援を得て帝国と市の支配権を奪い、ギリシア人の非常な嘆きと老イサキオスの悲しみのうちに僭主となった。父イサキオスは息子の悲劇的な最期のことを聞くと、悲嘆のあまりすぐに亡くなった。諸侯とドージェはこの酷い裏切りのことを聞き知って攻撃の手を緩めず、様々な機械でもって城壁と塔を昼夜を分かたず幾つとなく破壊した。かくて戦争は二重となり、双方の間でいくつもの激しい戦闘が繰り広げられたのだが、その一つの最中、諸侯とヴェネツィア人によって僭主の皇帝旗が勇敢に戦い取られた。それには喜ばしいことに我らがマドンナの御姿が描かれており、ギリシア皇帝たちが帝国の平安と永続を願って、戦いの時には必ず持ち歩く慣わしとなっていたものだった。この御真影は後にヴェネツィアに持ち来たられ、獲得された他のいかなる高価な財宝にもまして大切にされ、今日大変な崇拜と献身のもとに当市サン・マンコ教会に安置されているが、また戦争やペストの時あるいは雨ごいや晴天の祈りの折の行列で持ち歩かれるあの旗である。

最後に二隻のヴェネツィア・ガレー船が、風を得て城壁の下に横付けされ、帆柱の籠から梯子が渡され、ヴェネツィア人一人とフランス人一人が塔に侵入し、勇敢にも聖マルコの旗が打ち立てられると、艦隊から歓声が上がった。と同時に、陸側からはフランス人によって激しく市の門が突破されて、コンスタンティノープルは再び征服され、かくて僭主マルクルフは敗北した。彼はすぐに西側のオリア門から逃亡して市を放棄したのだが、玉座には二か月と数日しかいなかったことになる。諸侯は市中に侵攻し、宿営を張り、莫大な実入りをもたらした大規模な略奪をかけたが、夥しい戦利品は、その前に宮殿で結ばれていた取り決めに従って三つの大教会に集められ、諸侯とヴェネツィア人との間で等分された。また、皇帝選出に当たる十二人、ドージェ側からヴェネツィア人六人と諸侯側からも六人、フランス人司祭四人とロンバルディア人領主二人、が選ばれた。この選挙のため彼らは、ヴェネツィア・ドージェの宿舎になっていた宮殿内のとある豪華な礼拝堂に籠り、何時間にも渡る長い討議の末、略奪の前に取り決められていたやり方に則って、フランドルとエノーの伯ボードゥアンを皇帝に選んだ。すなわち、十二人のうち票の一番多かった者が皇帝となる、一人が同数の場合はくじ引きをし当たった者が皇帝となる、皇帝とな

った者はコンスタンティノープル帝国の四分の一を支配し、もとギリシア皇帝の住ま居であった市内のボンカリオンとブラケルナの両宮殿を居所に得る、帝国の残り四分の三はヴェネツィア人とフランス人諸侯、もっとも彼らは自らを巡礼と呼ばせていたが、とで等分する、但し聖職者たちは、皇帝に選ばれなかった側から総主教を選出し、聖ソフィア教会を治め、聖堂参事会員を任命し、教会国家全体を支配する自由を有する、というものであった。コンスタンティノープル総主教は、その崇敬と富の点で当時ギリシア人の間ではローマの我らが教皇に劣るところ少しもなかった。ヴェネツィア人は、フランス人側のボードゥアンが皇帝に選ばれ、ヴェネツィア・ドージェにはデスポテ despot<君主>の称号（当時大変名誉な称号だった）が与えられたので、コンスタンティノープル総主教にはトンマーゾ・モレシーニを選出し、帝国は先に取り決められたとおり直ちに四つに分割された。つまり、一つは皇帝ボードゥアンが取り、残りの三つは他の諸侯とヴェネツィア・ドージェの間で等分された。かくしてドージェとその後継者たちはこれ以降何年にもわたって、ロマーニャ〔ラテン〕帝国全体の四分の一と半分〔つまり八分の三〕の統治者、なる称号を有することになったのである。モンフェッラート侯ボニファートは、あらゆる手段で帝権を手中にしようとしたのだが幸運はボードゥアンにあって果たせず、その家臣となりその代わりに友情の印としてテサロニケ王となった。また、皇帝戴冠の折（1204年5月）、ハンガリー王ベーラの姉妹でかつて故老皇帝イサキオスの后であったマリーアと結婚し、その家来を引き連れてテサロニケ領〔マケドニア地方〕へと赴いた。ヴェネツィア人は、トラキアの多くの町とエーゲ海の島々とモレーア〔ペロポネソス半島〕の大部分からなる自分達の帝国の所有と占領へと向かった。また一つの布告を発し、自からの費用で船団を武装したヴェネツィア人は誰であれ、上記の島のうちカンディア〔クレータ〕とコルフを除くどれでも好きなものを取ってもよい、とした。そこで、当時の文人で総督ダンドロの顧問としてやって来ていたヴェローナのラバーノ・ダッレ・カルチェレは、ドージェの許可を得てネグロポンテ島を領有するに至ったのだが、数年後それを維持するに足る力を持ち得ぬことを悟り、自分からドージェに譲った。同島にはその後ずっとその統治のため代官としてヴェネツィア貴人が派遣され、ついにはその支配下に組み込まれた<sup>8)</sup>。



総督ダンドロは、帝国の分割で割り当てられたアドリアノーブル市攻撃中、ヴァラキア[ブルガリアの北、ドナウ河北岸]とブルガリアの王ヨハンニツァに迫害されて同市に逃れてきていたギリシア人の手にかかって死亡し、コンスタンティノーブルに運ばれ、荘重な葬儀をもってサンタ・ソフィア教会に葬られた。後に触れるが、ドージェの死に先立ってボードゥアン皇帝が捕虜になるという大事件があり、かくも険しく困難な事業にあって皇帝もドージェも、自分たちの頭か政府となるべき者が誰もいないという事態に遭遇したコンスタンティノーブルのヴェネツィア人は、ある日一堂に会し、時に一千三百五年 [6月 29 日]、(再び同地にやって来ていた) マリン・ゼーノ殿を正式にポデスタに選んだ。その際、将来ヴェネツィアのドージェによってその時どきにその顧問と共に派遣される、あるいはコンスタンティノーブルのポデスタとして任命される行政長官あるいは統治者は誰であれ、ヴェネツィアに割り当てられた市と帝国のかの部分のポデスタ、つまり真の統治者にして行政長官として受け入れられるべきことを決議した。またポデスタは、ロマーニヤ帝国の四分の半の支配者の称号をもつと理解されること、最初フランス人皇帝やそれまでダンドロが履いていたと同じく、深紅の絹の靴下(皇帝の印し)を着用すること、も決定した。かのダンドロこそ、その裁判官・顧問・高位聖職者、その他誉れ高く彼のもとに集っていた多数の官吏や司法官とともに、その施政の始めに、帝国封土はヴェネツィア人以外には譲渡され得ないという布告を発し、ドージェから封土を授けられていた者たちにそれを保証したのであり、その他にも国民並びに国家全体のために多くの措置を予め講じたのだった。そして彼の後も、コンスタンティノーブルにフランス人皇帝が続く一方、ヴェネツィア共和国からはこの帝国領土の支配のために秩序正しく派遣されたポデスタが途切れることなく引き継ぎ、その領土はそれ以後も、ドージェ・ダンドロがその称号を保持していたところから、ギリシア人からはデスポタート *despotato* と呼ばれたのだった<sup>9)</sup>。

一方、とある戦闘でブルガリア・ヴァラキア王ヨハンニツァの兵の手にかかって捕虜となり、後に逝ったボードゥアン皇帝の死後は、その日まで帝国代官[バイロ]の肩書きで多大の勇氣と決断をもって軍を統率していたその弟アンリが、コンスタンティノーブルにいた諸侯によって後継者に選ばれた。彼は

一千二百六年八月二十日聖ソフィア教会にて、その頃ローマから戻った総主教トシマーズ・モロシーニから厳かに帝冠を戴いた。モロシーニはローマで教皇インノケンティウス三世からその総主教職の承認を賜り、またテーベ大司教にも選任されていた。皇帝アンリは、聖スザンナの枢機卿にしてローマニヤ教皇特使ベネデット同席のもとにマリン・ゼーノ殿に対して、ヴェネツィアに割り当てられていた四分の一半を極めて丁重かつ愛情あふるる言葉でもって確証し、また、ギリシア人支配下にある他の市を征服・維持するための援助と支援をも約束した。彼はその後、テサロニケ王となっていたモンフェッラート侯ボニファチオの息女アニエーゼと結婚し、彼女も二月に女帝の冠を戴き、父侯爵がアンリの忠臣となるよう取り計らった。ボニファチオは、キプスラ市の下を流れる川 [マリカ川、トラキア地方] のほとりで娘婿の皇帝アンリと会談し、テサロニケ領の確認を得たが、自領に戻るところをヴァラキア人とクマニア人の雇い兵の大群に襲われ、戦闘中重傷を負って一千二百七年 [9月] に死亡した。

皇帝アンリは、あるときはギリシア人の支援のもとにアジアにある帝国の多くの市を暴政下に置いていたテオドロス・ラスカリスとともに<sup>10)</sup>、またあるときはブルガリア人やヴァラキア人の大群を率いて襲いかかり、何度となくコンスタンティノーブルの城門近くまで押し寄せて大損害を与え、住民や家畜を大量にヴァラキアに奪い去っていたその王ヨハンニツァと戦ったりして絶えず戦闘にあったが、一千三百十六年六月テサロニケにて在位十年にして跡継ぎのないまま死去し、帝国は姉妹ヴィオランテ [ヨランド] に遺した。彼女は誉れ高き騎士オーセール伯ピエール・ドゥ・クートネに嫁いでフランスにあったが、兄アンリ皇帝の死を聞いて、夫と共にローマにやって来、一千二百十七年四月サン・ジョヴァンニ・ラテラーノにて教皇ホノリウス三世より厳粛で華々しい儀式のうちに二人揃って戴冠された。彼らはすぐ封臣から一人を選んで名代としてコンスタンティノーブルに派遣し、ロジェーロ・ペルマリーノ、マリン・ストルラート、マリン・ゼーノ殿 (彼らは当時のヴェネツィア総督 [ピエトロ・] ジャーニの特使として同市にあった) に対して、以下のことを固く誓わせた。すなわち、自分たちが帝位にあるかぎり常に善き忠実な協力関係が守られること、またその日までにローマニヤでヴェネツィア人との間に結ばれ

たあらゆる取り決めや契約、叙品や位階、すなわち書面によるとよらぬとにかかわらず、かつて皇帝フランドル伯ボードゥアン次いでその弟にして後継者アンリによって、ヴェネツィア共和国とドージェの名代としてその時までその領上に駐在したあらゆるコンスタンティノーブルの統治者やポデスタとの間に結ばれたすべてが守られること、である。

して同皇帝は妻の女帝とともにローマを発って布林ディチオ[布林ディジ]に至り、教皇から特使として派遣された枢機卿コロナとともにヴェネツィア・ガレー船に乗り、ドゥラツォ[アルバニア沿岸都市]の陣地に赴いた。そこは帝国の最初の分割でヴェネツィアに割り当てられていたのが後に失われた地であり、皇帝はそこを奪取して自分に譲ってくれるよう丁重に頼んだのだが成就しなかった。というのは、テオドロス・ラスカリスの家来アルバニア公テオドロス・コムネヌスなる強力なギリシア人が暴力でもってそこを占領していたからである。この男、ギリシア的狡猾でもって、まず仲直りしたいと見せかけて皇帝ピエールを市に迎え、同市を贈る振りをし、さらには恭しくコンスタンティノーブルまでお供しようと申し出、一方女帝の方は海路をヴェネツィアのガレー船で先に送り、皇帝は特使と共に陸路を行った。が、とある日彼は皇帝を食事中に殺害し、枢機卿コロナを投獄した<sup>11)</sup>。かくも突然で予期しえぬこのニュースがコンスタンティノーブルにもたらされると、誰も皆大きな不安に捕らえられた。が、同市には当時ポデスタとしてイアコモ・ティエポロ殿が再び来ており、市においても帝国においても慎重かつ判断良く措置を講じ、帝の死にともなって生じた混乱を数時間のうちにすっかり鎮めた。そして、フランス人側の事態が日に日に悪化し、また彼らから当然期待してしかるべきだった救援がもたらされなかったのをみて、同市で平和裡に暮らし安全を保つには、スルタン・ラスカリスほか各地で皇帝と戦っている近隣の領主たちと何年間か休戦するのがよいと判断した。これは、彼の裁判官や顧問、および亡くなった皇帝の代わりに代官に選ばれその不在中市を治めていたフランス人バロン、コノン・ド・ベトゥヌの協力のもとに行われたのだが、その間に皇帝ピエールの息子ロベールがフランスからコンスタンティノーブルにやって来、ある期間帝国を統治した(とも言われる)母が死ぬと、一千三百二十年父ピエールの後を継いで戴冠した。帝位は本来は長男たる兄フィリップのものであった

が、自らすすんで弟に譲ったのだった。

彼は、ヴェネツィア共和国から派遣されたポデスタたちが採ってきた優れた措置や、絶えず続けてきた帝国政府における親切な助言を見て、当時再びポデスタの任にあったイアコモ・ティエポロ殿にこの上なき敬意と名誉を捧げ続けた。そして、いかなる種類の事柄であれ何事によらず、帝国顧問たちよりも先に彼と相談・協議すべきことを命じた。また、いかなる決定においても先任皇帝たちのしきたりにしたがって常にヴェネツィア・ポデスタの助言を請い、書面において言及する必要がある場合は必ず、父や叔父たちにならって、ヴェネツィア・ドージェを己が最も親しき友にして帝国の同僚と記していた。また私は、その帝権にとっても、同時にポデスタのイアコモ・ティエポロ殿にとっても四年目の一千二百二十四年四月二十日付け発行になる、セリンブリア〔トルコ領シリヴリ〕にいるヴェネツィア人に対して認められた、上述皇帝ロベールの特権認可状を読んだことがあるが、その中で彼は、ヴェネツィアドージェ、ピエトロ・ジャーニ殿から書面で求められたとおり、最初に割り当てられたもの以外、ヴェネツィア・ポデスタたちが新たに獲得したロマーニャの帝国の他の領土をもすべて承認しており、また、そのままの言葉を引用すれば、「我々が五つの領土で有する如く」、つまり最初の諸侯が獲得した領土が彼らの死とともに大部分皇帝の所有に帰したごとく、ドージェ・ジャーニとその後継者たちは、上述の新たに獲得された帝国領土についても同一の支配権と権限を有して当然であると述べている。ヴェネツィア人に対する皇帝のこうした愛想と好意も決して理由がないわけではなく、自分の力がギリシアで極めて弱体化し、当時その肩に帝国全体の大部分が懸かっていたヴェネツィア人から以外に緊急かつ多大な支援を期待できぬことをよくわきまえていたが故に、非常な名誉と敬意を払って遇したのであった。ポデスタのイアコモ・ティエポロ殿は、この時期にテオドロス・ラスカリスと五年間の休戦を結んだ。ラスカリスは、妻が兄弟殺しのアレクシオスの娘だった関係上、コンスタンティノーブル陥落後ほどなくギリシア人によって帝位に推戴され、現在ナトーリア〔アナトリア〕と呼ばれるコンスタンティノーブルの対岸に当たる地域をずっと支配していた。そして彼との間に、厳かな宣誓のもとに多くの事項が取り決められたのだが、それらは後に、ヴェネツィア国家にもロマーニャのデスポタートにも共に

大きな利益と名誉をもたらすこととなった。何よりも、ヴェネツィア人とヴェネツィア商人が安全かついかなる障害や損害もなくラスカリスの地で商売することができ、海上であれ陸上であれ常に自由に往来でき、自ら好むいかなる種類の商品であれ何等の課税、つまりコメルキョ *comercio*、を支払うことなく上述の地で売買することができる、としたことだった。コメルキョとは、当時も今もコンスタンティノープル、シリア、その他トルコ帝国支配下にあるすべての地で、トルコ人自身も含めて誰もが平等に納める慣わしになっている一種の税金のことである（このコメルキョ税はしかし、コンスタンティノープルにおいてもロマーニャにある他のいかなるヴェネツィア領においても、ラスカリス配下の者によって支払われていた）。さらにもしヴェネツィア人かその属領民の船が彼の支配下にある地で危険にあったときは、積み荷はそっくり返還されるべきこと、またもしヴェネツィア人もしくはその属領の商人が彼の領土内にて死亡し遺言を残している場合は、その遺産は実際に遺族に返還されること、もし遺言なく死亡した場合あるいは死去の際身内の者が誰もいなかった場合は、その所有物は、正当にその権利を主張できる者が現れるまで死亡した地の領主のもとにそっくり留め置かれること。また、厳かな宣誓と特別の約束をもってするに、ラスカリスはその帝国内にて、ヴェネツィア・ドージェはそのデスポタートにていづれも、イペルペロ金貨もマヌラート金貨も鑄造する権利を有しないこと（マヌラート *manulato* とは、ギリシア人の間で評価の高い種類の硬貨で、その鑄造者コンスタンティノープル皇帝マヌエルにちなんでかく呼ばれる）、またそのどちらかに似るいかなる種類の金貨も、それぞれ自分たちの用に供するもの以外は造ってはならぬこと。またラスカリスは、いかなる形であれ自分の船舶あるいは船隻をコンスタンティノープル市に派遣してはならぬこと、休戦中ドージェの許可なくヴェネツィア領で兵を募ってはならぬこと、である。こうした事を取り決めたのが、その能力ゆえに後に当共和国統領の位に登ったかのイアコム・ティエポロ殿であり、彼はヴェネツィアの法規をすべて収集整理し、一卷の書にまとめさせたのだが、その中にコンスタンティノープル支配当時そこから当市に持ち来られた、覚え書きの形でだが、ヴェネツィア人の遺言について同市で守られていた布告が記されているのが今も見られる。すなわち、もしヴェネツィア・ポデスタかその代理の者、あるいは

は少なくとも当共和国から派遣された顧問の一人の署名のない限り信を置くべからず、と。テオドロス・ラスカリスはティエポロとの休戦の後、自分たちに有利となるよう皇帝ロベールと姻戚関係を結ぼうと目論見、娘エウドキアを嫁がせようとした。が、彼の総主教は、ラテン人と姻戚関係を持つことはほとんど自分たちの規律に反するとしてこれを認めたがらず禁じたがため、その狙いを達することはできなかった。そこで彼は、この望みを実現すべく様々な手立てを試みたが果たせず、とうとう怒りのうちに死んでしまい [1222年]、帝国を娘婿、娘イレーネの夫でそれまで公爵と呼ばれていたジョヴァンニ [三世]・ヴァタツェに譲った。というのも、アルメニア人妻との三度目の結婚で生まれた息子はまだ未成年で、統治する資格はなく、一方コンスタンティノーブルの僭主アレクシオスの娘であった最初の妻アンナとの間にもうけた二人の息子はもうどちらも生存していなかったからである。テオドロスは享年七十一才近く、約十八年にわたって支配し、(当時まだ出版されていなかったあるギリシア史で私が読んだところでは) 小柄で褐色、髭は長く先の方が二つに分かれ、片目はほぼ斜視、精力に溢れ戦いを好むが、怒りや贅沢から遠ざかっていられない質の男だったという。他の点ではごく寛大な君主で、とても鷹揚だったから、何か贈り物をしてそれで相手がすぐにも金持ちになるようしばしば望んだという。とりわけラテン人とペルシャ人との戦争では極めて不運だった。その遺骸は最初の妻アンナの遺骨のあるビティニアはニケーア市のイアチェント修道院に葬られた。

最後に、(話は戻るが) コンスタンティノーブル皇帝ロベールは、若者にありがちなことだが、軽率にも富貴の家柄の若きギリシア美人に恋をし、その乙女が自軍の最初からの隊長の一人だったブルゴーニュ人と母親によって婚約させられているのを知っていながら、それに顧慮することなくその女性を家に伴った。ブルゴーニュ人の方はこうした侮辱に我慢がならずして激怒し、皇帝のコンスタンティノーブル不在の折をとらえてある夜家来多数を従えて宮殿に侵入し、扉を破ってかの乙女と母親を捕らえ、その鼻と耳をそいでしまった。母親の方は、自分が娘の略奪の原因となったことを悔やんで海に身を投じた。この悲劇に皇帝はすっかり心を乱し、かの大将から加えられたこのひどい侮辱に対する怒りと哀しみのあまり、帝国をマリン・ミケーレ殿(当時ヴェネツィ



ア・ポデスタだったともいう)に任せて、もはやコンスタンティノーブルには戻らぬつもりで絶望のうちに出立し、イタリアにやって来た。ローマに赴いて、身に降り懸かったこの悲惨な出来事を教皇に訴えたが、しばらく聖上の元において親しく慰められ、コンスタンティノーブルに戻るよう諭された。が、その道中重い病気にかかってモレーアで死亡し、帝国を弟のボードゥアンに遺したのだが、彼はまだ帝国を統治できる年齢に達していなかった。ボードゥアンは、後に成年に達すると、舅のエルサレム王ブリエンヌ伯ジャン（彼は前皇帝ロベールの死後、娘マルタをその弟に嫁がせ、帝国政府の最初からの諸侯の助言を得て統治し、ヴァタツェの攻撃から数年間にわたってよく国を守った）の死ぬのを待って、コンスタンティノーブル皇帝の位に就いたのだった<sup>12)</sup>。

以上が、マルコ・ポーロ殿がその書の冒頭で、「時に我らが主の御年一千二百五十の頃 おい、総督殿の名代とてヴェネツィア・ポデスタが駐在する慣わしであったコンスタンティノーブルは皇帝ボードゥアンの御世に、云々」と書き記している背景である。

かくて彼は、時に一千二百九十八年ジェノヴァでこの書を書き著していたとき、ちょうど父と叔父が一千二百五十年ヴェネツィア・ドージェ、マリン・モレシーニ殿治下のコンスタンティノーブルにいた頃のことくに特に触れておこうと思い<sup>13)</sup>、己が旅を書き始めるに当たって、かつて祖国の有していた誉れ高い地位と偉大さを示さんがため、(たとえ当時ロマーニャにおけるヴェネツィア人国家はすでにギリシアにおけるフランス人領同様大部分失われていたとはいえ)その時代の記憶から始めるのがまことにふさわしくまた誉むべきことであると判断したのだった。その後彼が獄中にあった時までの四十八年間に、フランス人は彼がその名を挙げている上記ボードゥアン共々ヴァタツェによって追放され、ミケーレ [八世]・パレオロゴの力でギリシア人が以前のコンスタンティノーブル帝国に戻ったのだった。このかくも希有にして輝かしき出来事につき、我々のテーマに大いに関係すると思えばこそ、ごく簡単ながら(しかし知っておくべきいくつかの事は漏らさず)ここに書き留めて置きたいと願った次第である。というのも、当時の事について全くあるいはほとんど何も知らず、その頃これら君公たちが置かれていた状態をご存知ない読者諸氏にとって、これこのとおり三百年も前我が共和国がかくも永きにわたってコン

スタンティノーブルにポデスタを駐在させ、キリスト教精神の恵みをもってかくも美しく光輝ある市と、かくも驚嘆すべき帝国の一部の主人であったことを読んで、信じられぬと思えてはならぬと考えたからである。もっとも今は、キリスト教君主間の果てしない多くの争いのため、そこは不信の徒の支配下にあるのであるが。

以上、私も上に委細を尽くせず、また今までまだ誰によっても書かれたことのないこの歴史全体の筋道、なかんづく特にシャンパーニュとブリアの伯ティボーとブロアの伯ルイがボードゥアン他の諸侯と共に一千二百年フランドルで十字軍を組織し、シャンパーニュのさる町[ブルージュ]で議会を開いた後、翌年六人の誉れ高き諸侯を使節として信任状と沢山の贈り物を携えてヴェネツィアのドージェ・ダンドロのもとに遣わし、募り集めた四万人からなる三十八個の軍隊と共に、聖地を奪回すべくシリアに渡るための船舶と艦隊を要請したことをそもそもの発端とする、この遠征のことを詳細かつ順序正しく理解なさりたいお方は、当共和国の令名いや高き十人委員会の命により、我が息子パオロが目下ラテン語で執筆している歴史をお読みになるがよい。その仕事は、かくも輝かしく栄えある出来事が、時の隔たりと共に今までよりもさらにおぼろげになってしまうことのなきよう、大部ながら一巻の書にまとめるべく、いつもながらの寛大さをもって彼に託されたものである。ついては、今までに書かれたものがすべて集められ、一部は、当時コンスタンティノーブルから奪い取られた莫大な財宝と共に、これについて触れることのなかった歴史家たちによって当市に持ち来られた記録や信頼すべき書物の中から取られたものであり、また一部は、非常な権威と知謀を備えた偉大な一フランス人貴族直筆の、当代になってようやく発見され、サベッリコ<sup>14)</sup>も他のいかなる著者もまだ見たことのないという回顧録から取られたもので、その御方は、かの遠征にあって常にフランドル伯ボードゥアンとその弟アンリの傍らにあり、それを指揮し隅から隅まで通じていた者として、かの遠征を細部に至るまで詳細きわまりなくフランス語で書き表わさんとしたのだった。その書は数年前、サン・マルコの守護者たるコンタリーニ閣下が一千五百四十一年に皇帝カール五世治下のフランドル駐在大使であったとき、たまたまとある修道院の図書館で見つけ、一フランス人の手になる、今までどこにも見られなかったほどかくも正確かつ

輝かしく記述された己が祖国のかくも美しい歴史物語が、フランドルの一図書館の中で、ペン書きのたった一冊の書物の中に永遠に埋もれたままになってしまうのを惜しんで、当市に持ち帰ったものである<sup>15)</sup>。

さて、その我が息子の手になる歴史の中では、以下のことがお読みになれよう。これら諸領の変化と発展、当時のギリシア・アジア各地の皇帝や僭主たちの選出・投獄・死、彼らの国の混乱、そして最後にラテン人の手からのかの帝国全体の喪失、ローマにおけるヴェネツィア人の支配、その特権と誉れ高い権限、最初の帝国分割で割り当てられたトラキア・モレア・ペロポネソスの各市・土地・城あるいは村落の名前、エーゲ海の島々、それを占領した領主、失った領主たちの名前。自からは巡礼と称していたフランス人諸侯に割り当てられた帝国領土、相次いで帝位についたボードゥアン・アンリ兄弟自身の分け前、帝国獲得後の彼らの結婚と姻戚関係、モンフェッラート侯のテサロニケ王登位とその領土、そのハンガリー王姉妹との結婚。初代ラテン皇帝ボードゥアンの死、彼は帝位の最初の年ヴァラキア人・ブルガリア人との戦闘で捕虜となり、何か月も投獄され、首をはねられ、その首はテルノビツァ〔トロノヴァ、ブルガリアの町〕にいたその王ヨハンニツァのもとに運ばれたのだが、彼はその首を洗わせ、中身を取り除き、壺の形にして周りに金の飾りをいっぱい施し、杯の代わりにして酒を飲むのに用いさせたのだった。その他さらにまた、皇帝なきあと軍の指揮をとってアドリアノーブル攻撃に当たったダンドロ閣下の奮戦と死。マルコ・ポーロ殿が旅の冒頭で語っているところの、当共和国が永年にわたってコンスタンティノーブルに保持したポDESTAが、最初いかにして設けられるに至ったかその経緯、同市並びに帝国に駐在してきたヴェネツィア人行政官全員の名前。ヴェネツィア支配下の国々やギリシアから持ち来られた貴石・財宝・石柱・大理石像、神技ともみまがう金属製の素晴らしく美しい四頭の馬がコンスタンティノーブルから運ばれ来った次第、それは元はといえば、ネロがアウグストゥスの凱旋門から取ってきたものを、コンスタンティヌス皇帝がその凱旋門からまた取って、ローマからコンスタンティノーブルへと持って行ったものであり、今はサン・マルコ教会広場に面した回廊に置かれ、全世界から常に絶大な賛嘆をもって仰ぎ見られている。おびただしい数の聖者や福者の聖遺物多数、当市のあらゆる教会、修道院、それにサン・マル

コ教会ですらもそれで満ち満ちている<sup>16)</sup>。長期にわたった戦争、その一つは、テサロニケ王ボニファーチョがペロポネソスの僭主レオン・ズゴウロス [ナウプリア・アルゴス・コリント・ラリッサの領主] に対してなしたもの [1205] で、この僭主は極めて言葉巧みに口実をもうけてコラントとロマーニャのネアポリス [同半島の都市] を保持し、ラテン人に大きな苦しみを与えた。もう一つは、フランス人や皇帝アンリとともにヴェネツィア・ポデスタがギリシア人テオドロス・ブラナス (彼はフィリップ慈悲王の父フランス王ルドヴィヒ六世の娘アンナを妻にもらおうと、残りのギリシア人のうちひとりフランス人と手を結んだ、アンナはコンスタンティノーブル征服前の最初の結婚で皇帝マヌエルの息子アレクシオスの妻となっていた) と結んで、トルコで何度か行ったもので、その最初はテオドロス・ラスカリスに対するものであり、彼は最初の妻がギリシア人であった関係から帝国の権利を主張し、かの国の大部分を支配しており、海峡を隔てたヴェネツィア人とフランス人に多大の損害を与えた。次はトラキアにおけるヴァラキアとブルガリアの王ヨハンニツァに対するもので、彼はその兄弟ピエトロとアッサンの代 [1187-96] 以来、相続上の理由からギリシア・ラテン人に敵対し、トラキアのネアポリス、パニドス [マルモラ海岸の古都]、エラクレア [マルマラエレジュリジ、同]、タウロロ現キオルリック [キルクラレリ、トルコの町]、その他コンスタンティノーブル近郊に至るまでのかの国の多数の都市を破壊した。そして長年戦いに明け暮れた後、とうとうテサロニケ近くで肺炎で死亡したのだが、ある晩夜中に一人の兵士にわき腹を槍で突かれる夢を見、当時それは彼がどのような死に様をするか神が予め告げられたものだと噂されたのだった。

とまれ、十分に否おそらく十分すぎるほど沢山の脱線や長い余談でもって、まず最初かの著者の書の冒頭の文から取ったところを解説したからもうこれくらいにし、マルコ・ポーロ殿の書のそこここに見えるいくつかの土地についての若干の説明に移ることとしよう、親愛なる読者諸氏の大きいなる知性をもつてしてもいささかの解説は必要とするであろうから。

【註 (I-4)】

1) 'Esposizione di messer Gio Battista Ranmsio sopra queste parole di messer Marco Polo :

«Nel tempo di Balduino, imperatore di Constantinopoli, dove allora soleva stare un podesta di Venezia per nome di messer lo dose, correndo gli anni del nostro Signore 1250», *Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanese, Torino Einaudi 1980, vol. 3, pp. 37-55. 前回の参考文献の他に、E. A. Cicogna, *Delle Iscrizioni Veneziane II*, Venezia 1827, の Ramusio 家の項(pp.310-37)。制限枚数の関係上注は最小限にとどめたが、同書編者ミラネージの脚注以外ラテン帝国の歴史については:Frederic C. Lane, *Storia di Venezia*, Torino Einaudi 1978; Alvisè Zorzi, *La Repubblica del Leone*, Milano Rusconi 1989; ルネ・グルッセ(橋口倫介)『十字軍』白水社 1989。[ ]内は訳者注。人名・地名はなるべく原音あるいは慣用のものに変えたが、不明のものはそのままイタリア語読みにした。

2) ラムージョの主たる典拠は、著名なヴィラルドゥアンの回顧録であるが、その原文入手の経緯については本文の最後に明らかにされている(注 15)。他に、同郷の歴史家サヌード Marin Sanudo il Vecchio (1270-1343) の十字軍史 *Liber Secretorum fidelium crucis*、歴史家でもあったドージェ、アンドレーア・ダンドロ Andrea Dandolo (1343-54) のヴェネツィア年代記 *Venetorum Ducis Chronicon Venetum*、ビザンチンの外交官歴史家ジョルジョ・アクロポリタ Giorgio Acropolita (1217-82) の十字軍史など。ラムージョのこの序文は、ヴィラルドゥアン他が原典で刊行されている今ではその価値は減じたが、ヴェネツィア側からみた、その後の同市の海外発展の一大契機となった第四回十字軍ならびにラテン帝国史としてなお貴重な価値を有する。

3) 史料によっては一世: Bonifacio di Monferrato (1150ca-1207)。

4) 前年結ばれた契約では、ヴェネツィア側が十字軍士約 3 万 5 千(騎士 4 千 5 百と馬匹・従者 9 千、歩兵 2 万)の輸送に必要な船団 2 百隻と兵糧、それにガレー船 50 隻と必要な乗組員 5 千人を、1202 年 6 月 28 日から向こう一年間提供するのに対して、十字軍側は銀 8 万 5 千マルク支払うというものだった。ところが同年ヴェネツィアに集結したのは約 1 万人、手付け金も 3 万 5 千マルクが支払われただけで残り 5 万マルクが滞ったため、それと引き換えにザラ次いでコンスタンティノープル攻撃の方向転換となる。エジプトとは密接な通商関係にあり、かえってビザンチンとは商売敵の間柄にあったヴェネツィアには、聖地侵攻の意志はあまりなかったといわれる。

5) 神聖ローマ皇帝フィリップ(1197-1208)の妻は、ビザンチン皇帝イサキオス二世アンゲロスの娘イレネ・アンジェリーナ。従ってその息子小アレクシオスとは義兄弟となる。この父子がアレクシオス三世によって廃位・投獄されたのは 1195 年。息子が 1201 年に脱出

して、フィリップに助けを求めた。この年、ポニファーチョはフランスからの帰りに同宮廷に立ち寄っており、三者の間でコンスタンティノーブル攻撃の話し合いが持たれたものと考えられる。

6) アレクシオス・ドゥカス・ムルツフロス Alexios Ducas Murzuplos : アレクシオス三世の義兄弟、次のアレクシオス四世の宮廷でも重臣。十字軍と密約を結んだ父子皇帝に対するビザンチン人の反乱により、1204年1月29日帝位に就き、アレクシオス5世を名乗る。

7) コンスタンティノーブル攻撃と略奪は1204年4月9-13日。ボードゥアンの皇帝選出は5月9日、戴冠は同16日。選挙では、ヴェネツィア・ドージェ・ダンドロにはフランス諸侯が、ポニファーチョにはそのジェノヴァとのつながりからヴェネツィア人側が反対したと言われ、結局7対5でボードゥアンとなった。ドージェ側の称号は、<Dominatore della quarta e mezza parte di tutto l'Impero della Romania>として知られる。

8) 帝国分割に当たってヴェネツィアは、内陸領土よりもアドリア海からコンスタンティノーブルにいたる海洋交易ルートの拠点を押さえる政策で臨んだ。実際に領有あるいは保護領化したのは、コンスタンティノーブルの八分の三、サンタ・ソフィア教会と総主教領、ナクソス・アンドロス・キオス・エウボエアの諸島、ペロポネソス半島西南端のモドン港とコロロン港（アドリア海の人りに睨みをきかす「共和国の両眼」）、アドリアノーブル市とガリーポリ市、マルモラ海の諸港、の諸地域。クレータ島は、ポニファーチョがアレクシオス四世から報酬として貰ったのをすぐヴェネツィアに売り渡し(1204.8.12)、その征服には多大の困難を伴ったが(1210)、後のヴェネツィア交易の一大拠点となり、1669年トルコ人による占領まで共和国領として残った。コルフ島は、1206年に占領されたが後に放棄された。ヴェネツィアに割り当てられたギリシア西部は亡命ギリシア人コムネノス政権が樹立され、ヴェネツィアの占領下には入らなかった。ネグロポンテ（エウボエア）島は、ここにあるとおり最初カルチェレとその二人の兄弟（後にこの二人によって分割される）に与えられたが、1209年以降はヴェネツィアの保護領下に入り、1407年トルコに征服されるまで続く。

この時期に後のポーロ家の活躍の舞台も整えられたことは、コンスタンティノーブルに同家の支店があったこと、1300年クレータ島に赴くにあたって認められたマルコの腹違いの弟マッテオの遺言状、帰路の寄港地ネグロポンテにも支店があったこと、などからうかがえる。また、ラムージョが用いた写本の所蔵者ギジ家はこの時、ティノス・ミュコノス・西スポラディス諸島を領有している（cf.「序文一」注28、45）。

9) が、その後の歴代ポデスクは明確ではない。初代 Marino Zen (1205.6.29-)がいつまで



その任にあったか不明。二代目 (?) Jacopo Tiepolo はクレタ島カンディア初代ポデスタ (1210-)の職に8年あったところからすると、1217年頃就任したものか。その後1229年ヴェネツィア・ドージェとなるまでに再任されている。Marin Michele も任期不明。帝国崩壊時最後のポデスタは Marco Gradenigo。一方当時の歴代ドージェは 1 Enrico Dandolo (1192. 6. 1-1205. 6. 1), 2 Pietro Ziani (1205. 8. 5-1229), 3 Jacopo Tiepolo (1229-1249. 6), 4 Marino Morosini (1249. 6. 13-1253. 1. 1), 5 Ranieri Zen (1253. 1. 25-1268. 7. 7)。以下マルコの時代までは、6 Lorenzo Tiepolo (1268. 7. 23-1275. 8. 15), 7 Jacopo Contarini (1275. 9. 16-1280. 3. 5), 8 Giovanni Dandolo (1280. 3. 31-1289. 11. 2), 9 Pietro Gradenigo (1289. 11-1311. 8. 13), 10 Marino Zorzi (1311. 8. 23-1312), 11 Giovanni Soranzo (1312. 7. 13-1329)。

10) テオドロス・ラスカリス Teodoros Lascaris (1175ca-1222) : アレクシオス三世の娘婿で同五世の義兄弟。1204年のコンスタンティノープル陥落時に妻のアンナ・アンジェリーナとアナトリアのニケーアに逃れ、ギリシア人朝臣と亡命政権を建ててラテン帝国に抵抗した。

11) 同地方は、イサキオス二世とアレクシオス三世の叔父ミケリス・コムネノスがエピロスにギリシア人政府を建て、その後継者の弟テオドロスとともにラテン帝国に対立した。皇帝ピエールの死の真相については不明。この元オーセール伯ピエール・ド・クートネは、アシル・リュシェール (木村・福本訳) 『フランス中世の社会—フィリップ・オーギュストの時代』 (東京書籍 1990、pp 365-71) に、悪逆非道の封建領主の一例として登場している。

12) 皇帝ロベールの死は 1228 年、その時弟のボードゥアンは 11 歳、前エルサレムエ王 (1210-25)ジャン・ド・ブリエンヌがしばらくその摂政に当たった後、1231年皇帝となり、1237年死亡。すぐボードゥアン (妻はブリエンヌの娘マリーア) が帝位に登り、1261年ラテン帝国滅亡の時までその位にあった。以上から歴代ラテン皇帝は、1 Baudouin (1204. 5. 9-1206), 2 Henri (1206. 8. 20-1216. 6), 3 Yolande & Pierre de Courtenay (1217. 4-1219?), 4 Robert (1221?-1228), 5 Jean de Brienne (1228(1231)-1237), 6 Baudouin II (1237-1261. 7. 25)。

13) 二人が同市から一回目の東行に出立したのは 1260 年頃のことであり、その時のドージェはモレシーニではなくラニエーリ・ゼン (注 9)。

14) Sabellico (1436ca-1506) : 本名 Marcantonio Coccio。詳細なヴェネツィア史 (1487)、古代から現代に及ぶ膨大な世界史 (1498-1504) が知られる。

15) フランス側の侍大将で実質的なオーガナイザー、ヴィルアルドゥアン Geoffroy de Villehardouin, *Histoire de la Conquête de Constantinople* (伊藤敏樹訳注 『コンスタンチノー

プル征服記 第四回十字軍』筑摩書房 1988)、そのオリジナル原稿が、ここに述べられているとおり、コンタリーニによって 1541 年ブリュッセルからヴェネツィアに持ち帰られ、ラムージョの手に入ったもの。そのラテン語訳注の仕事が 1557 年 1 月 23 日十人委員会より息子パオロ Paolo (1532-1600)に託され(とすると、ラムージョはこの最後の部分を死の半年前に書き足したことになる)、1573 年には出来上がっていたが、それが印刷されたのは、祖父ラムージョと同じく書記局にあって外交官として活躍したその子ジローラモ Girolamo (1555-1610)によって、父パオロの死後 1609 年のこと。フランス語原文テキストは 1601 年リヨンにて、彼自身の手になるイクリア語訳は 1604 年ヴェネツィアにて、いずれもジローラモによって出版された : cf. Cicogna pp. 330-6; Parks pp. 143-4。したがって、ラムージョのこの序文はその最も早い紹介となる。

16) サン・マルコ教会には今も、クリストの血・十字架の釘・聖ジョルジョの腕・洗礼者ヨハネの頭蓋骨の一部、などのこの時の聖遺物がみられる。

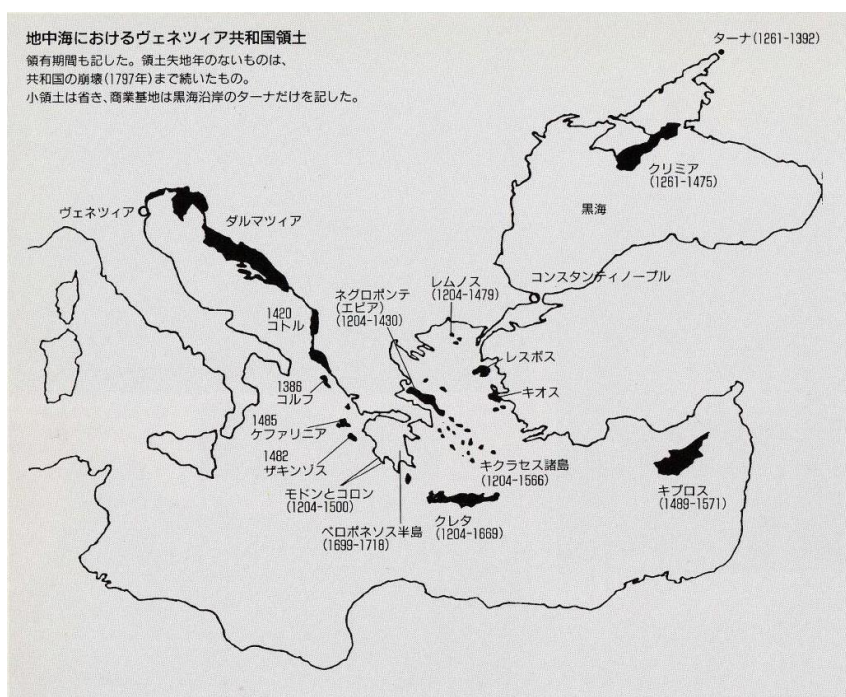


図 2 ヴェネツィア共和国海外領土 (1204~1797) (ルカ・コルフエライ p. 23)

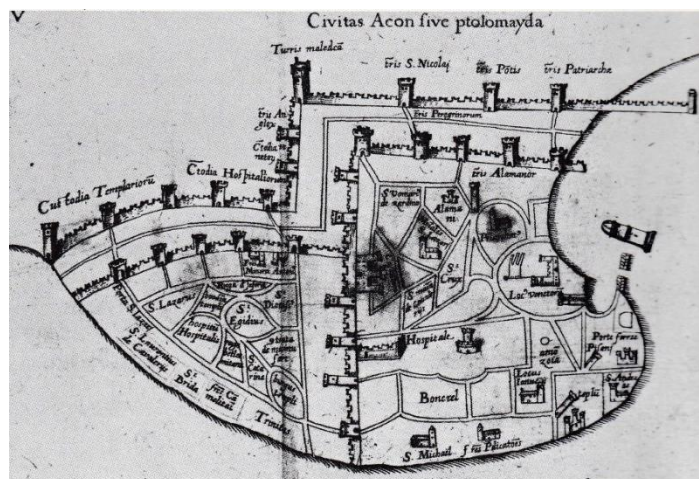


図3 アークレ地図 (Venezia e l'Oriente, ed. Zorzi, Electa 1981, p. 55)

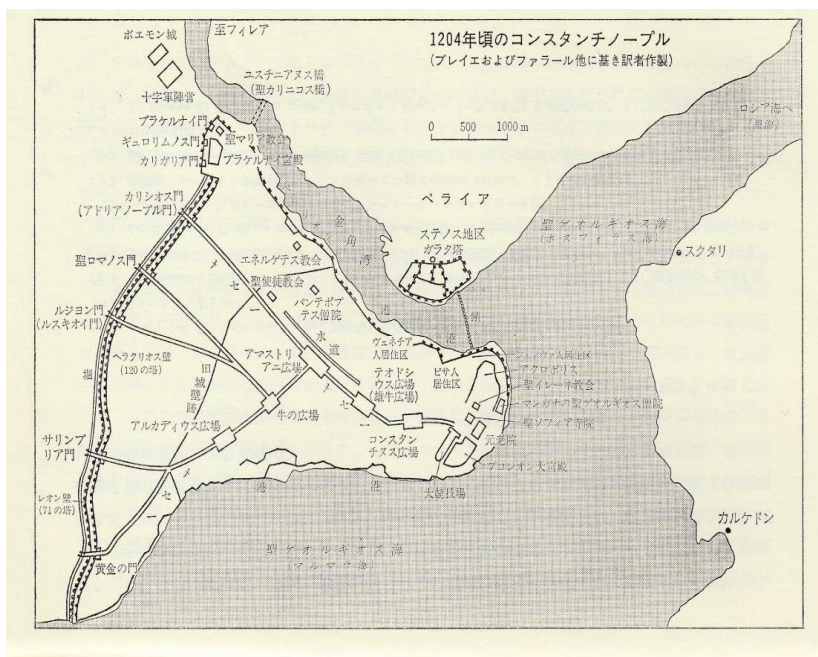


図4 1204年頃のコンスタンティノーブル (ヴィルアルドゥアン p. iv)



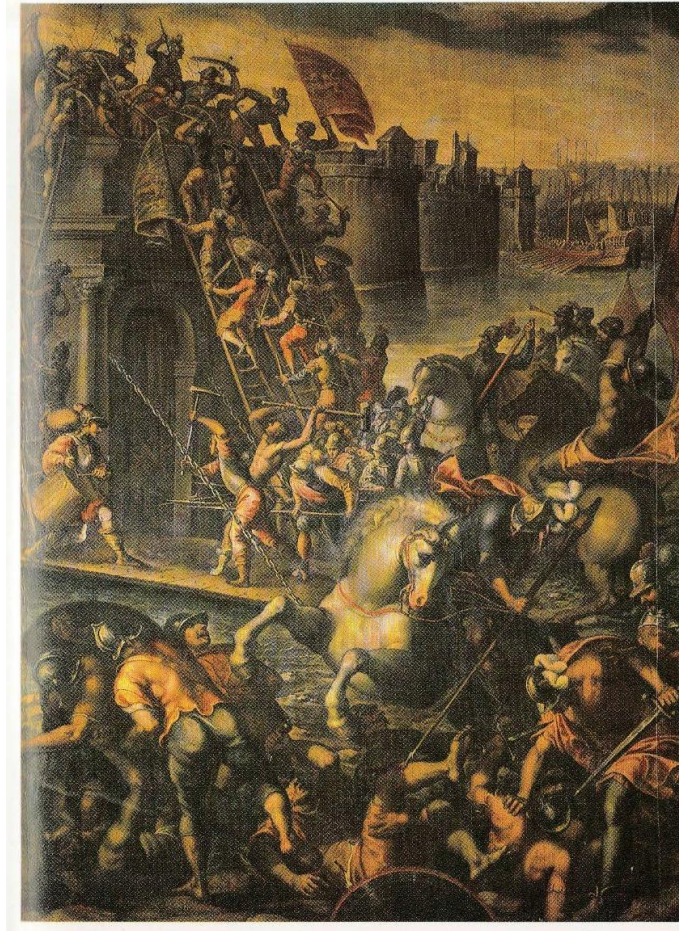


図5 ティントレット「ザーラ攻略」(ヴェネツィア総督宮)



図6 コンスタンティノープルに迫る十字軍の船団 (BNF fr. 5594, f. 217r)